金はおかしいな」と思えるように、アンテナの感度を高めていくことに力を入れているわけです。働いていて「おや？」と疑問を持ったときに、相談できる私たちのような団体や、労働基準監督署や労働組合などの機関や団体のことを知ってもらうきっかけになればと考えています。実際に若者の中には、そういう知識がなかったり、面倒くさがったりすることで、結果的に健康を損ねたり、損をすることがあります。

――中・高校生を見ていて感じることは。

中学生や高校生、大学生にも感じることですが、「○○ができない」のではなくて「○○を知らない」ということです。学校の先生方も含めて、大人にはそのような目で若者を見てほしいですね。「できない」と決めつけるのではなくて、「知らない」のであれば「教える」「伝える」ということが必要です。そのためには、ティーチングだけでなく、良さを引き出すコーチングなどの手法も必要です。「できない」のであれば「できる」ようにするしか方法はありませんが、「知らない」というその前の段階があるのであれば、解決の方法もいろいろあります。

イメージ力が弱い若者

――「知らない」ことの背景には何があるのでしょうか。

「知らない」ということの背景には、家庭で親の働く姿が見えなくなったり、母親の就労で家庭でも1人でいる時間が多くなり、人とのコミュニケーションの機会がなくなっている問題があると思います。

特に、「自分でイメージする、想像する」力が弱くなっていると感じます。われわれの間では「妄想力が足りない」という言葉で表現することが多いのですが、特に「底辺校」と言われる高校の生徒たちには、考えることをあまりしてこなかったこともあって、この「イメージする力」が貧弱です。ですから、絵を描くことや音楽を創ることでもいいのですが、そういうイメージを使って自分の感性を磨いていくところから始めることが大切ではないでしょうか。

――そのような若者に、どうアプローチしているのですか。

「本を読め」と言っても、まず漢字が読めない、辞書で意味を調べる習慣もない、ましてやネットで検索などしたことがないという現状があります。また知識欲も含めて、欲求すること自体もあまりない状態です。家庭では、おなかが空いたらご飯を食べればいいし、お金があればコンビニに行って買うこともできます。ほとんど寝て起きるだけで生活ができて、生死に関わる状態にもなりません。職に就くための欲求自体が弱いわけです。お金も車も欲しいけれど、ないならないでも構わないという感覚です。そういう若者に「本や新聞を読みなさい」と言っても、「読んでどうなるの？」という言葉が返ってきます。

体験不足という問題も大きいです。ネット社会の罪なところは、自分が体験しなくても情報だけは得られるという点です。例えば、「この映画は面白いのかな」と興味を持っても、ネット上の評判を見て、「面白くないなら、見に行かない」と決めてしまいます。自分が体験してみないと答えの分からない問題にまで、他人の感性は自分とは違うかも知れないのに、確実かどうかも分からないネット上の情報に踊らされています。結果として、行動することが減り、体験も減ることで、本来、行動したり体験すれば身に付く知識や知恵も身に付かないわけです。

そこで、私たちは若者に対して行動することの大切さ、体験することの大切さを伝えています。また、若者への支援は答えを見つけるというより、選択肢を増やしていく手伝いをすることに力を入れていきたいと考えています。